

答申に見られる)、すなわち、ほんの少数のハイタレントと多数の安上がりの単純労働者をつくりだす政策、②高校教育の多様化政策、それによる職業高校の地位の低下、工業高校卒業者は、かつて保障された「中堅技術者」への道も次第に困難となっていった。などがあったのではないか。

(4) 著者の次の主張、「現代社会における〈教育から仕事への移行〉は、個々の若者が一定の試行錯誤を通じて苦しみながら着地点を見つけ出していくプロセスとならざるをえない。」「〈教育から仕事への移行〉を第1義的には個々の若者が自らの責任で取り組む過程として構築する」については理解できる。それは、学校でどんなに丁寧な指導をしても、学校の斡旋で就職した職場が、在学中イメージしていたものと大きく異なりミスマッチを生じることが多々あるからである。それは、学校外での就職支援機関による斡旋でも同じだと思う。

今後、学校での就職指導は、「若者が試行錯誤しながら自らの責任で己の天職を見出していく取り組みに対する支援にしか過ぎない」ものとして位置づける必要がある。

しかし、「教育機関が学生・生徒に就職先を斡旋・紹介する慣行を将来的には廃止する。」

ことについては、長い間、工業高校の教育に携わっていた私は今のところ理解できない。

今日、工業高校での就職指導は、生徒の希望を最優先に就職斡旋を行っている。また、求人票には、「職種」が明記されていて、企業は、生徒が高校で学んだ専門学科(職業能力の一種になる)を考慮して採用することが多い。求人数を超える生徒が希望した場合、単純に「学業成績」だけでなく、適性なども考慮して調整している。

学校間、生徒間の格差など「学校経由の就職」には様々な問題もあるが、生徒にとっては3年間学んだ高校の先生、自分の能力や適性をよくつかんだ先生から卒業後の進路についてアドバイスを受けられることは良いことではないか。教員にとっても、就職指導を通じて、生徒たちが就く学校外の職業と労働の世界を知るチャンスでもあり、それは教育活動の改善にも生かされていく。

公的な就職支援機関が十分に整備されていないだけでなく、労働者派遣法が制定され、その利用業種が拡大される。有料職業紹介事業が許可されるなど労働法制が労働者にとってますます悪化している状況の下では、学校による生徒への就職支援が益々必要で重要になっていくと思う。

(東京都立小金井工業高校・全・囑託)

本の紹介

渡邊 晶 著

## 『大工道具の日本史』

森 下 一 期

本書は、旧石器時代、縄文時代から現代までという長いスパンで、建築に関わる道具の変遷を跡づけたものである。しかし、道具だ

けを取り出すのではなく、プロローグにおいて、「建築用材、建築構法と部材接合法、建築工作技術、建築工人、建築生産工程と主要道

具といった内容を記述している」と著者自身記しているように、道具と建築材料、ならびに工法、さらには人間との関連性が浮き彫りになることを意図した内容となっている。

資料については、文献資料、絵画資料、実物資料、建築部材(刃痕)を用い、先行研究を丹念に跡づけるのみでなく、復元実験の資料も、縄文中期末の磨製石器による伐木作業、製材作業、接合部材加工を取り上げ(富山県桜町遺跡)、また、14世紀末、岡山県吉川八幡宮本殿の刃痕にもとづく打ち割り製材実験(文化財建造物保存協会1998年)などを豊富に活用して動的な記述がなされている。

建築用材については、発掘された木質遺物の樹種が掲載されている報告書約3000冊を分析して縄文時代から近世までの樹種利用の状況を明らかにした文献に依拠しつつ、地域や建築物による特徴も記述するなど、書物の題名からは推し量れないような内容が盛り込まれている。

目次を見てみよう。

手道具の歴史と人類の未来——プロローグ——  
木の建築をつくる技術と道具

植生と建築用材／木の建築の構法と部材接合法／木の建築の工作技術／木の建築をつくる工人／建築生産と道具編成

大工道具の誕生——旧石器から縄文時代——

縄文時代の建築用材／揺籃期の建築構法と部材接合法／縄文時代の建築工作技術／建築工人の誕生／縄文時代の建築を復元する鉄器の導入と大工道具の発展——弥生・古墳時代——

広葉樹から針葉樹へ／弥生・古墳時代の建築構法と部材接合法／石器から鉄器へ  
渡来した新しい建築構法と部材接合法

古代・中世の建築用材／仏教寺院建築の伝来／文献に見る建築技術

大工たちの近世

近世の建築用材／成熟する建築技術／職人たちの時代／完成へと向かう大工道具

多様化する大工道具と技術

最高水準に達した大工道具／大工道具の発達史／道具発達史における階層性  
大工道具の一万年——エピソード——  
と、全体が時代区分による記述となっている。

大工道具の歴史というと、私など、すぐ村松貞次郎さんの岩波新書『大工道具の歴史』が頭に浮かぶ。それと何となく違うことが気になって、ひもといてみた。これは、1973年が初版だから30年も前の書物で、目次は

第一章 道具再見

第二章 ノコギリ(鋸)

第三章 カンナ(鉋)

第四章 オノ(斧)・チョウナ(鉋)・ノミ(鑿)・ツチ(槌)・キリ(錐)

第五章 プンマワシ(規)・マガリカネ(矩)・ミズハカリ(準繩)

第六章 スミツボ(墨壺)

第七章 トイシ(砥石)

第八章 大工道具の産地

といった具合で、道具別にそれぞれの歴史が語られていた。今現在手にしている道具が、それがどのような過程・さまざまな工夫・改善を経て現在に至ったか、渡邊さんが示している同種の資料を使って説かれている。道具という自分と自分が手にして見ているものに目がいくので、道具別に語られた方が取っつきやすいと感ずるのは私だけだろうか。

それもあってではないかと思うのだが、村松さんの『大工道具の歴史』は広く読まれ、それをこえる書物は長らく出てこなかったように思われる。書くのはばかられる、といったところであったかもしれない。それほど調べたわけではないが、確かに道具に関する書物が出されているものの、それらは写真集とか、オランダへわたった(シーボルトなどが持ち出した)大工道具とか、あるいは個別の道具(例えば吉川金治『鋸』、『斧・鑿・鉋』)を取り上げたもので、正面から大工道具全体

の発達史を取り上げたものはないように思う。

本書『大工道具の日本史』は、そういった状況に一つの角度をつけて、挑戦した書物といえるだろう。その角度とは、各種の道具を駆使して完成される建物を軸に据えることといえる。したがって、当然のことながら、個々の道具の発達史ではなく、その時代の道具のコンビネーションが建築様式と関連して問題とされることになっている。

そういった迫り方だから、「道具発達史に見られる階層性」という項目も立てられたのだろう。「古代の六世紀後半に伝来した礎石立基礎の仏教建築をつくる主要な道具として、鉄斧と鉄鑿のほかに、鋸とカンナ(やりがんな)が加わり」、精度も高め、上層の人々が利用するさまざまな用途の建築をつくるために使われた。しかし、「庶民階層が住む山村集落では、数千年前からの建築技術である掘立基礎の住居が近世後半までつくられ」「上部構造が股木の柱と丸太の桁などを縄で結ぶという原始的な技術は、18世紀後半まで山間地集落で継承されていた。」また、少なくとも古代後半の集落跡からは斧、鑿は出土しているが、鋸、カンナは見られないという。道具という面からだけでは見えない視点と思われる。道具というつつい道具そのものの変遷、発展に目がいってしまうのだが、その道具自体が生活の中に息づいているのであり、その生活のありようで異なっている、という以前にはな

かった視点を与えられたといえる。

とはいえ、正直なところ、余り読みやすい書物ではない。専門用語が多すぎるきらいがある。建築構法は知らない事柄も多く、読み飛ばしてしまった箇所も少なからずあった。また、「木の建築の接合技術」の項など、具体的な使用場面なしに分類分けしているの、容易には頭に入ってこないで、字面を追っているだけのようなだった。後の章を読み進む中で、前を参照すると、ああ、そういうことか、とわかるところがある。柄装着部の袋式、穴式というのも全体をとおしてみてもなるほどと思った。図が豊富なのでイメージも持てた。『大工道具の歴史』にも後で見たら触れられていた。文字での説明だったので印象に残らなかったのだろう。

著者は、一貫して建築技術史の研究を続け現在財団法人竹中大工道具館の学芸部長を務められている。本書は、本格的な研究書である『日本建築技術史の研究——大工道具の発達史——』の一般向けということだろうか。同書は価格39,900円ということで残念ながら手にすることはできなかった。

いくつか気になるところにもふれたが、道具がどういった社会で、どのような場面で使われ、進化したかといった総合的な把握をする上では、個別の道具発達史とは違う趣と魅力を含んだ書物であり、一読しておきたいものである。(和光学園)

### データ入稿時のお願い

- ワードや一太郎などのワープロソフトでデータを入稿する際に、貼り込まれた図表や写真データのオリジナルも一緒に添えてください。
- また、ワープロソフトに依存した特殊文字の使用はなるべく避けてください。どうしても使用せざるをえない場合は、使用箇所を指示し、その旨をお伝え下さい。
- テキストデータ(拡張子がTXTのアスキーデータ)のみの入稿で、上付き下付きの英数字や、アンダーライン、傍点、ルビ、囲み野などある場合は、本文をプリント出力したものにそれらの指示をしてください。
- データ入稿後、本文の差し替えデータは受け付けられません。